

<抜刷り>

# 富士見市立資料館調査研究報告

## 第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
★資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています  
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします  
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

<資料紹介>

## 南通遺跡出土の下小野系土器について

高橋宏之（水子貝塚資料館）

### 1. はじめに

ここに紹介する資料は1971年4月、南通遺跡第1地点（富士見町教委1971b）より発見された深鉢形土器である。南通遺跡は、富士見地域の南端にあり、市境を北東に流れる柳瀬川の左岸、樹枝状に開析されている小支谷に南北を挟まれた、舌状台地上に立地する。台地の平坦面は約18～21mで、低地との高低差は8～11mを測る。遺跡周辺には、北側の支谷を挟んで北通遺跡、南側の支谷を挟んで三芳町北側遺跡、柳瀬川を挟んだ対岸の台地上には志木市西原大塚遺跡が位置する。

南通遺跡は縄文時代から平安時代に渡る複合遺跡であり、特に環濠を伴う弥生時代後期～古墳時代初頭の住居が約300軒発見されており、大規模な拠点集落である。このため、各地点の報告書では遺構外の遺物を報告できておらず、集落形成期以外の情報は乏しい。

### 2. 南通遺跡出土の深鉢形土器

ここで紹介する資料は胴上半部1/4の深鉢形土器で、縄文時代前期末～中期初頭の「下小野式」に比定される土器である。出土状況は不明である。

法量は、残存部の高さ29cm、推定口径約31cm、推定胴径約32cmを測る。器形は垂直気味に立ち上がるバケツ形を呈している。器壁の厚さは約6mm、口縁部は折り返し状口縁で、幅は4.8cmを測る。

縄文原体は、結束したRとLRの両末端を片結びにしたもの。横位に施文し、横位羽状縄文となっている。部分的に原体の上下を入替えている。器面の成形が粗く、縄文の押圧も弱いため文様が判別しにくい。

胴部の割れ方から、粘土帯の積み上げにより成形されており、粘土帯幅は4.5～5cm。粘土帯の接合部分に沿って横にヒビが入る。

胎土には長石、白っぽく透明でキラキラ光る鉱物（雲母？）、細かい砂粒を含む。土器表面の色は暗褐色、裏面は薄い橙褐色～暗褐色を呈する。

### 3. 胎土について

本資料の胎土の特徴は、今村啓爾氏（今村2010）の指摘する前期末～中期初頭の東関東の土器胎土の特徴（きめ細かく円磨した砂粒、雲母を含むのは稀だが含む場合は粒が細かく白っぽいものが多い、灰～黒褐色の良好な焼成のものが多い）に近い。東関東の利根川流域で製作された搬入品である可能性も考えられる。

東京都東久留米市多聞寺前遺跡出土の下小野系土器片を分析した結果（上條1983）では、石英を僅かに含み、長石と変成岩を多く含有する。重鉱物の割合（シソ輝石・普通輝石・角閃石）で角閃石の割合が多く、同遺跡から出土した阿玉台式土器と近い割合を示し、その製作地の推定として下総台地でも利根川下流域に求められるとしている。ただし、胎土中の変成岩は筑波山系（黒雲母など）か秩父方面（片岩や角閃石）か要検討とある。

### 4. 粟島台式土器について

現在、関東地方の前期末～中期初頭の土器については、編年も含めて今村啓爾氏の研究が網羅的となっている。今村氏の分析では、下小野系土器は前期末の東関東における粟島台式土器の流れをくむとされる（今村2010）。

粟島台式は千葉県銚子市粟島台遺跡を標識遺

跡として安藤文一氏により提唱された土器型式で、羽状縄文の多用、口唇上の縄文、口縁部などに縄で側面圧痕を施す土器群を指す。安藤氏は粟島台遺跡出土の土器群のうち、器形、焼成などで興津式に共通するところが多い一群を「粟島台Ⅰ式」、また施文、器形、焼成のすべてでより下小野系土器の様相を示す一群を「粟島台Ⅱ式」と細分し、時期を縄文前期終末に設定した（安藤 1977）。

それに先立ち、和田哲氏は船橋市古和田台遺跡の分析から、興津式以降の、縄文を施文する前期末土器群を論じた（和田 1973）。和田氏は、口唇上に縄文のあるものを a、無いものを b とし、興津式と共存せず、下小野式土器に連なる、十三菩提式に併行する東関東の独自性を示す型式とした。型式名は将来の純粋な遺跡の発見時に委ねるとした。

一方、芳賀英一氏の分析（芳賀 1985）によると、粟島台式土器は興津Ⅱ式土器に伴うとし、福島県冨宮西遺跡や中曽根遺跡出土の大木 5 式土器と口唇部の撚糸圧痕や羽状縄文などの特徴が酷似していることから大木 5 式（特に 5a 式）の中にその源流があるとしている。また芳賀氏は東北地方南部と東関東との結び付きについて、千葉県や茨城県からは大木 3・4 式の段階から少量出土し、興津Ⅱ式の段階では大木 5a 式系統の土器群が増加するなど両地域の関わり合いが深いことを指摘している一方で、隣の北陸地方では諸磯 c 式に大木 5 式がわずかに伴うだけで両者の関係は極めて薄いと指摘している。

今村啓爾氏（今村 2010）は、芳賀氏の指摘した興津Ⅱ式に伴う古い傾向にある土器（安藤氏の粟島台Ⅰ式、和田氏の分類 a に相当するもの）を大木 5a 式から諸磯 c 式古段階に伴う「先粟島台式」とし、諸磯 c 式新段階から十三菩提古段階に伴う土器（安藤氏のⅡ式、和田氏の分類 b に相当）を改めて「粟島台式」と設定した。粟島台式は元々粗製の傾向があったが、口縁部の側面圧痕などの特徴を残しつつ、十三菩提の中段階頃には下小野系土器へ移行するとした。

しかし前期末の東関東における遺跡数・資料数の激減という状況から、千葉県などではこれら前期末の土器型式を採用せず、興津Ⅱ式を前期終末とする編年観が根強いとも指摘した。

## 5. 下小野式（系）土器

「下小野式土器」は 1950（昭和 25）年 1 月、江森正義・岡田茂弘・篠遠善彦により千葉県香取市下小野貝塚を標識遺跡として型式設定された（江森・岡田・篠遠 1950）。

この「下小野式」の主な特徴は、器面全面に施された縄文（または無文）と縦または横方向に施文した S 字形の結節縄文である。また口縁部は輪積みの段をずらした幅の広い折り返し口縁が多く、撚糸圧痕を何段も重ねるもの、斜縄文だけのもの、結節縄文などがある（石橋 2000）。

この「下小野式」土器の大半は粗製の土器で占められ、中期初頭の五領ヶ台式に伴うことから、五領ヶ台式を構成する組成の一つと考えられてきた（谷井 1996）。

今村啓爾氏（今村 2010）は、下小野系土器は時期や地域差が明確に分かる一括資料に乏しく、十三菩提式や五領ヶ台式など、共伴する土器から各時期を特定する必要があると指摘している。また今村氏は粗製土器のみを抽出して型式名をつけるのは適当ではないとして「下小野系粗製土器」と呼称している。

近年の発掘調査による資料数の増加に伴い、前期末の東関東において下小野系土器が量的に主体をなしていたことが分かっている。千葉県宝導寺台貝塚では前期末から中期初頭にかけて、それぞれ少量の十三菩提式や五領ヶ台式に伴い下小野系土器と比定される土器片が出土しているが、下小野系土器の数が極めて多く他の型式を圧倒している（寺門 1984）。中期初頭以降になると胴部の結節縄文が横位から縦位になる傾向との指摘もある（近江 2013）。また中期初頭に入ると神奈川県など関東南西部の遺跡にも多量の下小野系土器が伴うようになり、五領

ヶ台Ⅱ式以降では神奈川県など海側の遺跡に多いのに対し、多摩や八王子などの内陸部では下小野系土器の出土は少ない傾向にある。

## 6. 富士見市周辺の下小野系土器

前期末の埼玉県では、諸磯c式以降、遺跡・遺物ともに減少し、十三菩提式期では特に零細な遺跡が目立つようになる。下総台地と武蔵野台地に挟まれた大宮台地は、東西の人々が行き交う接触地域でありながら、東関東の粟島台式や下小野系土器の出土は限られている（近江2015）。武蔵野台地でもこの傾向は変わらず、中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期まで継続するようである。

富士見市内における前期末から中期初頭の遺跡を概観する。

水子貝塚（富士見市教委 1971a）および隣接する氷川前遺跡（富士見市教委 2001）、また、貝塚山遺跡（富士見市遺跡調査会 1985）で諸磯c式後半期の土器片が出土している。

黒貝戸遺跡第32地点（富士見市教委 2017）で、土坑中から下半部が欠損している十三菩提式初期の波状口縁深鉢が発見されている。

東台遺跡（富士見市教委 1976, 1996, 2019）は、市内で最も前期末の土器がまとまっている。諸磯c式後半期から十三菩提式前半期であり、複数の土坑中から大形破片が出土している他、土製塊状耳飾が出土している。

打越遺跡（富士見市教委 1973, 1978）では、中期初頭の五領ヶ台式期の土器片がある程度まとまり、結節縄文を施す下小野系土器も出土している。縄文の施紋方向は横位のものも縦位のものもある。

北通遺跡（埼玉県遺跡調査会 1975）では諸磯c式から五領ヶ台式まで数片ずつ出土している。報告した土肥孝氏は、そのうち2片を前期末の興津式以降の縄文系土器とし、4片を五領ヶ台式期の下小野系土器としている。下小野系とした土器のうち3点は口縁部で、一つは下小

野系に特徴的な折り返し口縁だった。2点は胴部破片で、縦位の結節縄文が施されている。安藤文一氏はこの報告について、「粟島台式」が数片あり、大宮台地周辺におけるあり方を示す興味深い資料と指摘した（安藤 1977）。

南通遺跡第11地点（富士見市遺跡調査会 1991）では、遺構外から出土した十三菩提式土器片が19点報告されている。中段階を中心とするようである。

近隣では、南通遺跡と柳瀬川を挟んだ対岸に位置する志木市の西原大塚遺跡（志木市 1984）において、横位の結節縄文がある同一個体の土器片2点が発見され、赤褐色を呈し砂粒を多く含むことから前期末、横位の結節縄文という特徴と合わせて下小野系土器の可能性が指摘されている。同じく志木市の城山遺跡第46地点（志木市教委 2008）では十三菩提式期の可能性が高い住居跡が発見され、横方向の結節文と輪積み痕のある前期末～中期初頭の土器片2点も出土している。下小野系土器の可能性も考えられるが詳細は不明。遺構外からも同様の破片が出土している。

このように、埼玉県内において、下小野系土器は出土例に限られる。近隣を見渡しても下小野系土器の出土は非常に少なく、ほとんどが破片資料である。今村啓爾氏の分析では、下小野系土器は粟島台式より変化し千葉・茨城・福島地域にかけて分布していた系統で、十三菩提から五領ヶ台Ⅰ式期に横浜など南西関東の海岸部へ進出したとされ、内陸部への進出はないと指摘している。

南通遺跡出土資料は、報告例の少ない埼玉県で、器形や文様構成が分かる下小野系土器として貴重な資料である。横位の結節縄文が口縁部に施文されており、同様の例は神奈川県室之木遺跡、茨城県虚空蔵遺跡などから確認できる。時期については、幅広い口縁部の段を持つ円筒形、横位の結節のある羽状縄文などの特徴から、前期終末か五領ヶ台Ⅰ式期であると思われる。

## 引用参考文献

- 安藤文一 1977「粟島台式土器の設定 -東関東における縄文時代前期終末の様相-」房総文化(14) 房総文化研究所
- 石橋宏克 2000「176 下小野貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1 旧石器・縄文時代』千葉県史料研究財団
- 今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年 -その細分および東北地方との関連を中心に-」東京大学文学部考古学研究室研究紀要(4)
- 今村啓爾 2010「3E 章 前期末～中期初頭の粗製土器」『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 江森正義・岡田茂弘・篠遠善彦「千葉県香取郡下小野貝塚発掘調査報告」考古学雑誌 36(3)
- 近江哲 2013「出野尾洞穴遺跡出土土器の検討-房総半島南端における縄文時代前期末葉の異系統土器-」『千葉大学人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』(251)
- 近江哲 2015「大宮台地における縄文前期後葉～末葉の様相」『千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』(290)
- 上条朝宏 1983「縄文土器の製作 胎土分析 I」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣
- 埼玉県遺跡調査会 1975 針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告(26)
- 志木市 1984「西原・大塚遺跡発掘調査報告(抄)」『志木市史原始・古代資料編』※志木市教育委員会 1975 の抄録
- 志木市教育委員会 1975『西原大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財(4) ※未見
- 志木市教育委員会 2008「城山遺跡第 46 地点」『志木市遺跡群 16』志木市の文化財(38)
- 谷井彪 1996「縄文時代関東 五領ヶ台式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 寺門義範 1984「縄文時代前期後半から中期初頭にかけての一資料 千葉県宝導寺台貝塚の資料を礎にして」貝塚博物館 紀要(11) 加曾利貝塚博物館
- 芳賀栄一 1985「大木 5 式土器と東部関東との関係」古代(80)
- 富士見町教育委員会 1971a『水子貝塚発掘調査報告』富士見町文化財集報(1・2)
- 富士見町教育委員会 1971b『みなみどうり遺跡のあらまし』
- 富士見市遺跡調査会 1985『貝塚山遺跡発掘調査報告書 -第 2 地点-』富士見市遺跡調査会調査報告(24)
- 富士見市遺跡調査会 1991『南通遺跡第 11 地点』富士見市遺跡調査会調査報告書(37)
- 富士見市教育委員会 1973『打越遺跡』富士見市文化財報告(14)
- 富士見市教育委員会 1976『文化財調査報告 XI』富士見市文化財報告(11)
- 富士見市教育委員会 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告(28)
- 富士見市教育委員会 1994『富士見市内遺跡Ⅱ』富士見市文化財報告(44)
- 富士見市教育委員会 1996『富士見市内Ⅳ』富士見市文化財報告(47)
- 富士見市教育委員会 2001『富士見市内遺跡Ⅸ』富士見市文化財報告(53)
- 富士見市教育委員会 2017『市内遺跡発掘調査Ⅹ』富士見市文化財報告(69)
- 富士見市教育委員会 2019『市内遺跡発掘調査Ⅺ』富士見市文化財報告(71)
- 和田哲 1973「前期末葉土器の問題」『古和田台遺跡』船橋市教育委員会

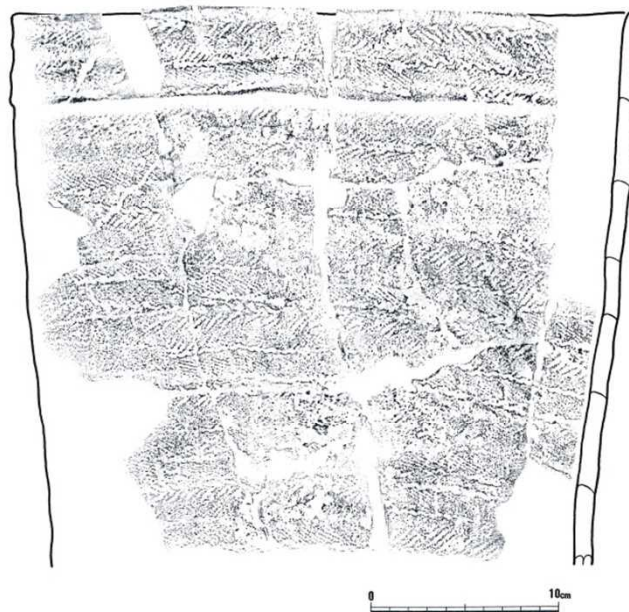


図1 南通遺跡例の拓影図 (S=1/4)



写真1 全体写真



写真2 口縁部アップ写真



写真3 胴部アップ写真